

2018年産小麦における赤かび病の発生と防除効果について

2018年産小麦における赤かび病の発生を調査した。地域・地点によって発病穂率に差があった。調査地点近辺のアメダスデータを検討したところ、多発の要因は、出穂期、開花時期の変動ではなく、防除のタイミングを逃したことによる可能性が高く、適期防除による発生抑制の効果は高いと考えられた。

内 容

2018年産小麦について、登熟期間に入った5月に、地域により赤かび病が多発しているとの情報が寄せられた。そこで栽培地域における赤かび病の発生状況を把握するとともに、多発の要因について考察した。

2018年5月22日、29日に播磨地域の10市町11地点を調査した。穂の発病程度とその穂数から発病度を算出した。その結果、調査地点によって発病度、発病穂率に大きな差が認められた(表)。農業技術センターの麦類気象感応調査では出穂期は平年より3日早い4月14日であった。降水量は4月は周期的に平年を上回る降雨があり、発病穂率の高い地点は感染のリスクが高くなる「開花始期から10日間」に降雨にあったことが考えられた。図に加西市(農業技術センター)における4月の

日降水量と出穂期、開花期を示したが、調査地点近辺のアメダスデータと比較したところ、量の差はあっても降水が記録された日はほとんど変わらなかった(データ省略)。このため、防除適期でもある「開花始期から10日間」は降雨の合間にあたり、ほ場内が乾くことを待ってもこの時期の防除は十分可能であった(2018年産の加西の場合、防除適期は4月19日から29日、図の赤色←→の期間)。罹病穂率が高い地点で赤かび病が多発したのは防除のタイミングを逃したことによる可能性が高く(例えば佐用では5月8日に実施)、それに対して、罹病穂率が低い地点では適期防除が実施されていた可能性が高く、発生抑制につながったと考えられる。

今後の方針

開花期予測システムと気象予報を活用して、小麦の生育状況を把握して、赤かび病を適期に防除するよう指導を徹底する。

松本 純一(病害虫部)

(問い合わせ先 電話: 0790-47-2420)

表 2018年産小麦における赤かび病発生調査

調査地点	調査日	調査ほ場数	発病度	発病穂率(%)
上郡町大枝	5/22	4	1.5	6.8
同上	5/29	1	0.7	3.0
佐用町家内	5/29	2	1.7	10.0
佐用町小赤松	5/29	3	2.4	15.2
たつの市上笹	5/29	2	1.5	8.9
宍粟市山崎町矢原	5/22	4	0.0	0.0
同上	5/29	2	0.0	0.0
姫路市香寺町溝口	5/22	4	0.0	0.0
神河町吉富	5/22	2	0.0	0.0
多可町加美区熊野部	5/22	2	0.1	0.2
西脇市黒田庄町石原	5/22	2	0.1	0.7
加東市曾我	5/22	2	0.2	1.2
加古川市志方町大澤	5/22	4	0.6	2.5

1地点2~4ほ場、1ほ場あたり連続する100茎の発病を3か所調査
 発病度 = (6×A+3×B+1×C) ÷ (6×調査茎数) × 100
 A: 穂の2/3以上の小穂または粒が発病しているもの、B: 穂の1/3~2/3の小穂または粒が発病しているもの、
 C: 穂の1/3以下の小穂または粒が発病しているもの、D: 発病なし

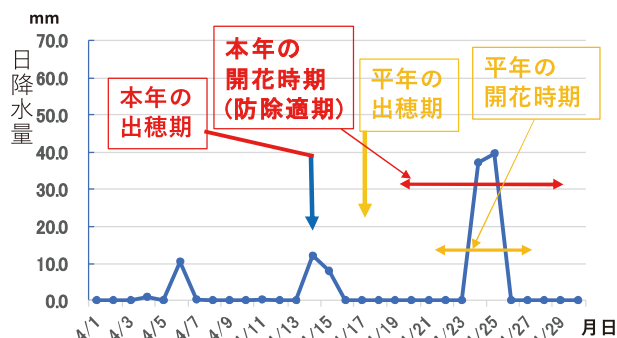


図 加西における小麦の出穂期、開花時期(2018年と平年)と降水量(2018年)